

# 第十一章 納見中將の自決

## (1) 戦犯出頭を前に

連合軍では戦後矢継早やに戦犯の摘発追及を行ない、多数の日本人戦犯容疑者が逮捕投獄されたが、二十年十二月一日納見中將はBC級戦犯に指名された。容疑の内容は同中將が公訴提起を俟たずして自決、これについての遺書や記録を残さなかったため、明かでないが、生前同中將が一瀬參謀長に洩らした話を断片的に総合して上海憲兵隊司令官当時の責めを問われたようである。同中將は少將当時昭和十五年十二月から十七年七月迄上海憲兵隊司令官として同方面の治安維持に任じたが、当時から熾烈化しつつあった抗日運動を終熄せしめるため徹底的弾圧を強行して抗日テロ団体の中核的存在として知られる「藍衣社」に属するテロ分子二十八名を一網打尽に検挙、全員処刑したと云われる。このことが戦後中国側の戦犯追及の対象にあげられ、容疑者として指名される因となったようであるが、この段階では宮古島に於ける米捕虜殺害は未だ連合軍側の知るところとはならなかったため、この件は関係ないと見るべきだろう。同中將は戦犯指名後官舎に引きこもり、沈黙考の生活を送っていたようで、すでに自決の決心を固めていたようである。一瀬參謀長はこの心境を察し、爾後決裁は參謀長限りに止め、原則として師團長官舎への立ち入りを禁ずる措置を取った。自決前夜の十二日參謀長、陸路、杉本兩參謀らを招き、それぞれ遺品を与え、それとなく袂別、その後服毒したものである。寝所はキッチンと取り片づけられ、日常使用していた文机には勲章、日記帳等が置かれていた。遺骸は米軍の検死を受けたのちダビに付され、遺骨は専属副官豊島中尉が復員帰国した際広島県尾道市木匠町市原に住むおはる未亡人に届けた。死因については

遺族に累を及ぼすことを虞れ、脳出血と発表され、復員記録でも公務死扱いになっている。

(納見中將辞世)

勝ち国の法や如何にも裁き得む

踏みし忠義の道は変らず

故納見中將略歴

一、明治二十七年六月二十日広島県尾道市木匠町市原に生る一、陸軍幼年、士官学校を卒え大正四年歩兵少尉任官一、大正九年一月シベリヤ出兵、ザバイカル州チタに進駐一、大正十年五月九日凱旋、敦賀上陸、十一年十二月陸大入学一、大正十四年陸大卒一、昭和元年陸軍大臣官房勤務一、同五年任歩兵少佐、教育総監部勤務一、同八年一月一七月ヨロツバ出張一、同八年歩兵中佐、宇都宮第十四師團參謀一、十一年十一月教育総監部付一、十二年八月教育総監部庶務課長一、十二年十一月一日歩兵大佐一、十三年七月歩兵第四十一聯隊長、支那事変に出征、広東、北海に上陸、三水占領一、十四年一月青島へ進駐、九月迄魯北道肅正作戦、九月北海及び南寧上陸作戦に参加一、十五年八月憲兵司令本部部長一、十五年十二月二日任陸軍少將、上海憲兵隊司令官一、十七年八月一日憲兵学校長一、十九年一月十六日台湾憲兵隊司令官一、十九年六月二十七日任陸軍中將一、二十年一月十二日補第二十八師團長

故納見中將は陸士二十七日期、前任者の榎淵中將(二十四期)より三期後輩、第三十二軍長參謀長(二十八期)より一期先輩にあたり、先島集團関係の同期生には歩兵第三十六聯隊長田村権一大佐、独立混成第五十九旅団司令部高級部員敷伊寿郎中佐などが居る。同中將の人となりについて杉本參謀は「秋霜烈日、頭腦明晰、綿密周到、細部に至る迄自から検討して満足する迄止まない、果斷実行型の將軍だった」と述べている

従って挙措進退も喧ましく、自己にきびしい反面、部下に対する態度も極めて厳格で少しもミスがあると遠慮会釈なく怒鳴りつけるので、気の休まる思いがなかったと、ある幕僚は回想している。同中将は着任直後宮古地区の作戦準備が予定より大幅に遅れていることに気付き、不満を抱いていたようで、神経質とも思われる程細事にわたっても督励の手を弛めなかった。ある日(着任後一週間前後とも云う)の如きは早曉司令部勤務の全将校を叩き起し「作戦準備が成っていない、真剣味に欠けている」と大目玉を喰わし、震え上がらせたという一幕もあった。

これは前任者の榎淵中将が女房役の参謀長に陸大出の俊才福地少将を擁し、幕僚の大半も満州時代からの子飼組が占め、氣質、性格、能力などについても一通り知悉気心も通じ、上下の信頼関係が確立されていたのに反し、納見中将は憲兵畑から飛び込んできた第二十八師団にとつては一種の新参者で馴染がうすく、又一瀬参謀長は陸大出と云っても専科出身、前任の福地参謀長とは同期(三十二期)ながら進級は五年も遅く、着任後ようやく大佐に進級すると云った調子で素質に於てもかなり見劣りがされ、納見中将としても部下の能力、人間関係について未だ全副的信頼を寄せる迄には至っていなかったと云えよう。更に前任者と違って余りにも強烈な性格をもつ新師団長に部下が一種の戸惑いを感じ畏怖、或は敬遠する傾向が生じ、司令部内の空気は必ずしもシツクリしい一因を作ったのではないかと思われる。

当時先島集団長の隷下、指揮下部隊(第三十二軍直轄となった歩兵第三十六聯隊を除く)には将官三名と九名の大佐が居たが、陸大出身は独混第五十九旅団長多賀少将のみで、参謀陣は何れも専科(参謀要員の速成教育のため設けられた修業年限一年の制度)出身の二流クラスに過ぎず、人一倍綿密な納見中将としては万事一任という心境には到底なれなかったのではないかと思われる。

多賀少将は陸大本科出身だが、陸士は納見師団長より一期先の二十六年、ただし陸大入学は二年遅く、少将進級は昭和十七年、納見中将より二年も後塵を拝している。経歴からみてもさほど出色した將軍とは思わ

捕虜処刑についての資料を遺さなかったため累を部下に及ぼした結果になったことは関係者にシコリを残し、割り切れない感情を抱かせることになったようである。一説によれば榎淵中将か、福地少将か、何れかでも残っていたらこのような事件を惹き起さずに済んだのではないかとの見方もあるが、首肯出来ないことでもない。

作戦担当の杉本参謀は十九年夏少佐転出のあとを享けて師団参謀に補職された有為な将校で陸士四十二期、支那事変では大隊長として参戦一時大本営に勤務したこともあって頭脳明晰、行動力に富み、命令即時実行を要求する師団長から重用されていたようで幕僚のうちでは出色の部に属した方だったようだ。高級副官の浜中佐は三十九期、如才のない副官タイプ、又幸田兵器、三浦經理、脇田軍医の各部長は一般的に有能な将校と云ってよく、師団長との折り合いが特にどうということはないが、何れにしても榎淵師団長当時の司令部の空気が新師団長の着任後はガラリと変わり、ピリピリした緊張感で包まれるようになり、一種の異和感が生じたことだけは否定出来ないようだ。

## (2) 復員急ピッチで完了

終戦後先島集団が当面する大きな緊急課題は二万七千名近い軍人軍属の復員であった。現地徴集の将兵は九月一日付で全員復員を終ったので問題はないが、残りは海上輸送によらねばならないので配船がどうなるかが問題だった。

開戦前五百数十万トンの商船隊を持ち、世界第二の海運国として七つの海に雄飛した日本はその有する船舶を殆ど失ない、外航に耐え得る船舶は僅か二十八万トンに過ぎなかった。

終戦時外地には陸軍二八六万名、海軍四十万名、それに軍属や一般邦人を加えるとおよそ六百万人が帰国の日を待っていた。これら老大人人員を手持ち船舶だけで運ぶとすれば優に十カ年近く要する計算となり、

れないが、師団長はかなり信頼していたようで、相談相手にしていたらしい。

安藤少将は陸士二十一年期の古参少将だが、経歴は配属将校、聯隊区司令官などおよそ第一線勤務とは縁が遠い、所謂陽のあたらない三流どころに終始し、平時なら大佐止まりを思わせる一般的な将官に属し、目立つような人物ではなかったようだが、性格は温厚そのもので部下からは信望はあったらしい。然しその軍歴などに徴しても師団長が自からの片腕として信頼を托す迄には至っていなかったと見るのが妥当ではあるまいか。

次に聯隊長クラスでは騎兵第二十八聯隊長の上田大佐が比較的受けが良く、親しかったようだ。同大佐は熊本師団在職中、荒木貞夫、香椎浩平、谷寿夫中将ら四代の師団長に副官として仕えた経験があり、気難かしい納見師団長の氣質をよく呑みこんでいたようだ。第二十八師団の聯隊長クラスでは十九年十月輜重兵学校長に栄転して宮古を去った輜重兵第二十八聯隊長の横山伊一郎大佐(のち少将)に次ぐ最古参で、同期には師団兵器部長幸田畔造大佐が居るが、幸田大佐は聯隊長転出の機会を逸し、大佐止まりで終った。

この外の聯隊長クラスでは歩兵第三連隊の怡土大佐、同第三十聯隊の富沢大佐、山砲第二十八聯隊の梶大佐は何れも二十八期で師団長より一期後輩、怡土、梶大佐は実戦の経験も豊富で戦場帰りの古強者と云ったタイプで陸路参謀の回想によればイザ実戦となった場合、一番信頼出来るのは梶大佐ではなかったかと云う。輜重兵聯隊長の宮川少佐は陸士五十一期の新進気鋭の青年将校で南方で砲火の洗礼を浴び行動も積極果敢師団長のお気に入りであるが接触する機会も多かったようだ。

参謀陣では前任の陸路中佐は三十八期、満州チチハル、ハルピンの特務機関に在勤、参謀勤務は第二十八師団が振り出し、後方任務を担当していた関係で捕虜管理の責めを問われ、貧乏クジを引く羽目になったが性格はオトリ型で、細かくて性急な師団長とは肌合いが合わず、師団長からは余り受けはよくなかったようだ。特に師団長が自決にあたって

連合国側の全面的協力がなければ解決は不可能だった。

集団では斯かる現況と見通しに立って復員完了迄は二カ年を要すると判断、長期残留計画を樹て食糧確保に万全を期すと共に九月二十四日海軍飛行場と測候所構内に連絡所を開設、米軍との連絡を密にすると共に復員業務のスムーズな運営をはかったが、将兵の帰心は矢の如く明けても暮れても乗船の連絡が何時あるかに関心が集中した。

十月二十日復員船第一号(海防艦第一九二号、宮古島近海の掃海のため派遣された)が連絡要員、患者などを乗せて出発した。

十一月に入り連合国側は海外からの日本人帰還を促進するため、リパティ型輸送船二百隻の貸与を決定、復員業務は一気に進む見通しがあった。同月二十五日米輸送船コーヘン号による第一回の大量復員輸送を皮切りに本格的な復員輸送が始まった。そして二十一年一月末迄には一部現地満期者と沖繩本島の作業援助のため送られた部隊を除いて全員の復員を完了した。

納見中将亡きあとの集団長代理安藤忠一郎少将、一瀬参謀長、陸路参謀などの集団司令部職員は二月上旬最後の復員船で出発、故国の土を踏んだ。

沖繩に送られたのは歩三、独立歩兵大隊などから抽出されたおよそ二千名で歩三の怡土聯隊長の指揮の下に二十一年十月迄労役に服したが、そのあと全員本土帰還を許された。

作業隊の編成について人選に問題があるとして不平や抗議が出たようだが、表面的なトラブルはなかった。何れにしてもこの作業隊に組み込まれた将兵はお蔭で復員が一年近く遅れ、云わば貧乏クジを引いた訳で人選に不満を持ったことは首肯できる。これにつき当時これが人選を担当した司令部付の某将校は名簿作製の基準は米軍の指示によったもので特定の部隊を意図的に作業隊に組み入れたような事はないと述べているが、宮古島戦犯事件発覚の端著が作業隊に編入された某中尉の口から洩れたことから推して戦犯追及と作業隊の人選とは何らかの関連があったのではないかと推定される節がある。

内地への帰還輸送は大体次の順で行なわれた(途中一部の変更があった。人員は二十年十月三十日現在)

順序 部隊号 輸送人員 摘要

1	独混59旅団	三、三〇二	
2	船工二三ノ一中	三一八	
3	二〇五飛大	三九七	一部残留
4	二六対空無線	五一	
5	独立四警戒隊	一四二	
6	要塞建築八中	二二二	
7	陸勤一〇九中	三一	
8	築城四中隊	九八	朝鮮人軍夫32含む
9	築城五中隊	一〇一	
10	作井九中	一〇二	
11	独歩三九七大	五七三	
12	作井八中	一〇五	
13	特機砲四七中	八三	
14	独自二八四中	一二四	
15	野重一連ノ一大	五八〇	
16	戦車27連ノ三中	一一三	
17	独機一八大隊	三二四	
18	30港湾基地大隊	七七九	
19	四 "	七六八	
20	四連絡艇隊	五八	
21	独速五大	四一四	
22	独混六〇旅団	二、七〇六	
23	水勤一〇一中	四二三	鮮人軍夫三七九
24	病馬収寮所	一〇	
25	兵器修理所	一一	
26	制毒訓練所	一一	

27	工兵二八連	四九八	
28	山砲二八	二、三五九	
29	騎兵二八	四九四	
30	歩三〇	二、八四九	
31	独速二五中	一三六	
32	師団司令部	四一二	
33	一野病	九七	
34	歩三	二、六一九	鮮人軍夫13
35	独速二六中	一三一	
36	兵器支廠	二七三	
37	貨物支廠	一四八	
38	第四野病	一五八	
39	師団通信隊	四五一	
40	防疫給水部	二二一	
41	宮古陸病	一一一	
42	輜重兵二八連	七五〇	

計二三、九三一(うち鮮人軍夫四五八名)

(註) 部隊名は一部改編などの関係で若干の変動がある。又部隊名は歩三(歩兵第三聯隊)独速二六中(独立速射砲第二十六中隊)のように略して記載した。